



## 在外研究レポート

著者	巖 廷美
雑誌名	エコノフォーラム21 : 学生と教職員のインターコミュニケーション誌
号	21
ページ	16-16
発行年	2015-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00026106">http://hdl.handle.net/10236/00026106</a>

# 在外研究レポート

巖 廷美 准教授

1. 留学先及び留学期間…2013年10月1日(2014年3月25日、韓国、ソウル大学)  
2. 留学中の研究内容…「クロスカルチャルな視点からの韓国語教育とハンゲル文字の普及の現状」を研究課題にソウル大学奎章閣研究所にて半年間研究活動を行った。研究機関中の具体的な研究タスクは、①現在の韓国語教育とハンゲル文字の普及の現状について日本国外の事情について調べる、②実際に韓国語教育が行われている地域でのその状況について現地調査を行うことであった。

①の活動としては、主にソウル大学主催の研究會、ワークショップ、シンポジウムに出席し現地若しくは海外からの研究者と研究交流を行った。また、海外(タイ、バンコク)の関連学会にも出席し、現在の研究のトレンドについてふれつつ、研究交流を行うなど、日本国外の学会や研究の傾向について勉強する機会を持った。

②の活動としては、今回の研究期間中は同じ言語圏であり、韓国人の人口も少なくないマレーシアとインドネシアにおける韓国語教育の現状について調査を行った。まず、マレーシアについてはマレーシアのクアラランプルに行き、

マレーシアで生まれ育った韓国人の子供に対する国語としての韓国語教育の実態と現地の人々に対する外国語としての韓国語教育の現状についてフィールド調査を行った。特にインドネシアについての韓国語教育の現状について2014年6月4日経済学部研究会にて「インドネシア、チアチア族における韓国語教育およびハンゲル普及の現状についての一考察」というタイトルで研究報告を行った。

3. その他(現地の研究事情など)…ソウル大学、奎章閣研究所では毎週のように研究会、シンポジウム、セミナーなどが開催されており、ほぼ前回出席していた。その内容も、文学、言語、芸術、建築、映画、文献学など、多岐にわたっており、それまで興味を持たなかった分野でも自分の研究と何らかの関係性があることに気付かされたことは大きな収穫であった。また、世界中から韓国学(及び国語学)の研究者が研究活動のため滞在しており、世界の韓国学の現状を垣間見ることができた。特に「著者特講」と題したシンポジウムは大変興味深かった。世界からの優秀な研究者を招き、著書について議論を行うものであるが、その議論の内容や仕方が

自由で生き生きとした研究者同士の斬新なバトルであったのが印象的だった。さらに、研究面だけではなく、ソウル大学の研究者への暖かい待遇は、ソウルの滞在を楽しいものにするのに十分なものであった。月一回のペースでパーティ、山登り、遺跡地探訪などのイベントが開かれており、研究者同士の個人的な付き合いの機会もたくさんあり、いろんな意味で有意義な時間を過ごすことができた。